

日本証券経済倶楽部

発行所 一般社団法人 日本証券経済倶楽部
編集発行人 小沼紀雄
東京都中央区日本橋茅場町 1-5-8
(東京証券会館)
〒103-0025 電話03-3669-7491
http://www.isec.or.jp

レポート

No. 558

中国、韓国と日本—求められる政策対応

拓殖大学総長

—渡辺利夫

(平成27年2月5日、当倶楽部第536回定例月例会における講演要旨で文責は事務局にあります)

はじめに

中国は、日本軍が国民党軍に降服文書を渡した日から七十周年に当たるとして、今年の九月三日には「抗日人民戦争勝利記念日」の記念行事を大々的に開きます。また、今年は一九六五年六月二十二日に「両国の懸案は完全かつ最終的に解決された」と日韓両政府が署名し、両国会でも批准された「日韓基本条約」が結ばれてから五十年です。

このように今年が七十年、五十年の節目の年であるにもかかわらず、むしろこれを契機に両国の反日が一段と強まりそうな雰囲気を感じ取れません。他国内のことですので、どうにもなりません。何とも嫌な気分です。本日は、「中国、韓国と日本—求められる政策対応」という演題でお話ししよう。ご依頼を受けましたが、具体的な政策まで論及する時間的余裕はなさそうです。基本的な事柄をお話していく中で、今後、日本がどのような立ち居振る舞いをしなければならないのかが、自然と分かるような内容にしたいと思います。

日中関係でいま何が起っているかは、すでに皆様も日々の新聞でご承知の通りです。日本固有の領土、尖閣諸島をめぐる、中国は極めて好戦的、挑発的な行動を繰り返し、日本は厳しい対応を迫られています。また、韓国では朴権恵政権が、従軍慰安婦問題をめぐって、「日本がしかるべき対応を取らない限り、首脳会談など開けない」と頑なな姿勢をいまだに崩していません。極東アジア情勢を長らく見てきた私にとっても、信じられないくらい厄介な状況になっています。

ただ、本日はその厄介な状況それ自体についてはなく、なぜ彼らがそのように日本を見るのか、日本に対してどのような観念を持っているのかについてお話しいたします。観念ですから、一世代や二世代で変わるようなものではありません。随分と昔から両国で紡がれてきたものです。これらの観念を理解していただければ、おのずと日本に求められる政策対応も見えてくるはずですよ。

中華民族の偉大なる復興

現代の中国が日本をどう見ているかですが、習近平総

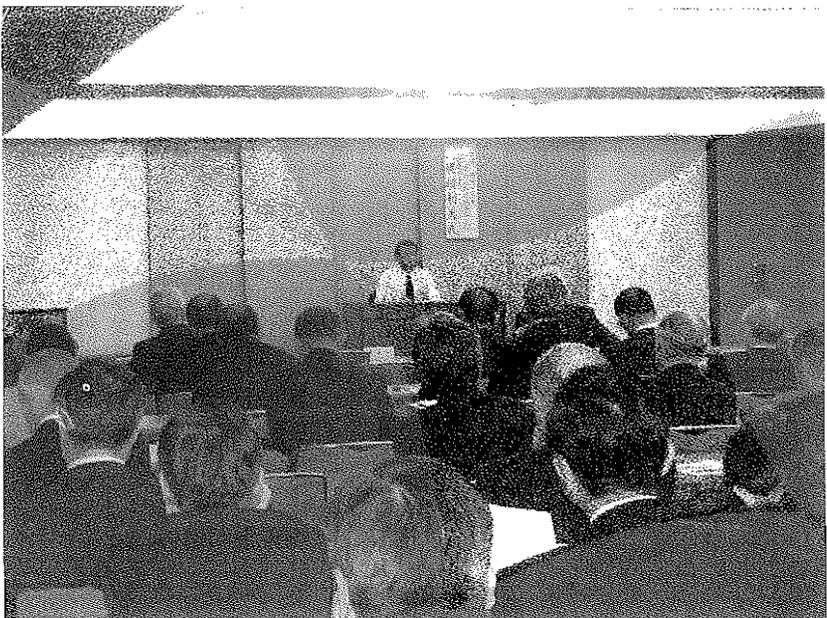
書記は、二〇一三年十一月の党総書記就任直後に、次のように述べております。「アヘン戦争での敗北以来、百七十年余にわたり屈辱の歴史を背負わされてきた我が中華民族が、遂に偉大なる復興への道を探り当て、世界を瞳みさせる成果をおさめつつある。中華民族の偉大なる復興こそが近代以来の中国人が最も強く待ち望んでいた夢である。現在、我々は過去のいかなる時期よりも、中華民族の偉大なる復興の目標に近づいている」。その後も現在に至るまで言葉を変えながら、「中華民族の偉大なる復興」を繰り返しています。

そこからは、「我々はアヘン戦争に敗北して香港島を取られ、対面の九竜半島を九十九年間租借され、以来、沿海の主要な都市は租借地として欧米列強の隷属化に置かれ、日本にまでも攻め込まれる屈辱の近代史を味わわされてきた。この屈辱をそそぐ時が、いま訪れた。中華民族の偉大なる復興、この中国の夢を我々は、いまやつかもうとしている。党员よ、国民よ、頑張ろうではないか」という極めて強い民族的なメッセージが伝わってきます。

中国がWTO（世界貿易機関）に加盟したのは二〇〇一年ですが、この年を中国人は中国が先進国の一員、一人前の国と国際的に認知された年と受け止めています。その後、二〇〇八年北京オリンピック、二〇一〇年上海万博を開き、二〇一二年にはIMF（国際通貨基金）報告で、GDP（国内総生産）規模が日本を抜き去り、アメリカに次ぐ第二位の経済大国になりました。

まさに屈辱の近代史を歩んできた中国人の人々の血をたぎらせるような状況です。習近平総書記の演説は、その国民の胸に強く訴えるものでした。

「中華民族の偉大なる復興」とは、偉大なる過去があり、その過去を現在に復元したい、そういう衝動を指導部が持っているということです。この意味するところが、しばらくは私にもよく分かりませんでした。しかし、多くの同学者や中国の知識人の方々と議論している中で、「ああ、そういうことなのか」という解釈に至りました。中国の歴史は王朝の変転、転覆史です。十七世紀前半、一九二六年に大変な王朝が登場しました。これが「清」です。「大清帝国」とも言われています。清は漢族の王



朝ではなく、満州族（女真族）が北京に攻め入ってできた征服王朝です。正確には「満清連合政府」です。清王朝は「大清帝国」と言うにふさわしい、世界で最高の栄耀豪華を極めた王朝でした。フランス革命やイギリスの名誉革命、いわゆる市民革命や産業革命のはるか前にできた巨大な王朝であり、世界の国々から仰ぎ見られる存在でした。

日本人の感覚からすると、一国の国土はほぼ一定だと思いがちですが、中国の歴史地図を繰ってみると、その国土は小さくなったり大きくなったりと伸縮自在です。その中で、最大の版図を築いたのが清帝国です。いま問題が起こっている、トルコ系イスラム教徒の居住地域の新疆ウイグル自治区（東トルキスタン）をはじめ、モンゴルやチベットなどを合計すると、中国地図の三分の一以上にも上りますが、これら全てを含んだのが大清帝国です。異民族をも併合した巨大な版図で、国土面積は前の明王朝の三倍近い。歴史上、最も大きな版図を築いた帝国です。現在の中華人民共和国は、この最大の版図をほぼ継承して今日に至っています。だからこそ、いま中

国は少数民族問題に悩まされているのです。

中国の伝統的国際秩序観念

「中華民族の偉大なる復興」を目指す中国が、古代以来、周囲の国々をどのように見てきたのか、中国の伝統的国際秩序観念について考えてみましょう。それを典型的に表す用語が「華夷秩序」です。「中華（中原）」を中心として同心的に広がり、周縁に位置する人種や民族ほど文明度が低いとみなす古来の価値観念」と私は定義しています。

中心となる中華とは、黄河の下流域から中流域、河南省の鄭州近辺にある盆地のことです。昔「洛陽盆地」と呼ばれていた平原です。私の出身地である山梨県とほぼ同規模の面積ですが、そこでの戦いで勝ち抜き、権力を握った者が皇帝、天子様になります。「中原に覇を競う」「中原に鹿を追う」などの漢語的表現をお聞きになったことがあるかと思いますが、この鹿とは天子様のことです。この中原で権力を握った者が天子となる。大陸の真ん中に開いた花が「中華」です。

その中華を中心に、漢族の人口が増え、漢族社会が外縁的に広がっていきます。ただ、無現に広がっていくわけではなく、当然、外縁にぶつかります。その外縁の外を彼らがどのように見ていたのか。外縁の北の「北狄」は騎馬民族、狩猟民族のモンゴル族をさします。東の「東夷」は農耕民族や漁労民族、西の「西戎」は草原地帯の遊牧民族、南の「南蛮」は焼畑農耕民族や漁労民族です。

狄、夷、戎、蛮の四文字は、いずれも全く同じ意味です。一言で表現すれば野蛮人です。蛮という字は、ワイガヤガヤを意味する「亦」の下に「虫」と書きます。つまり、人間の顔はしているものの、ワイワイガヤガヤとうるさい虫のような存在で、時々中華に攻め込んできては財宝や女を略奪する、そういう文明を持たない野蛮人と言ったイメージです。

いまもそうですが、中国は価値の上下関係に重みを置く社会です。日本人は対等で平等な人間観を好み、自然にそのような人間関係を築きますが、中国はビジネス関係でご存じの方もおられるでしょうが、ランクキング、つまり価値の高低を気にします。留学生と付き合ってい

ても、つくづくそう思います。したがって、中国社会の同心円形を立体で描くと「中華」が一番上にある円錐形になっています。文明の価値は一番上が最も高く、外縁に至れば至るほど価値が低く、外縁を超えると、人間の顔はしているものの、人間ではない蛮族だという見方が観念として続いてきました。これを分かりやすく「中華思想」と言う人がいますが、思想史の専門的用語では「華夷秩序」です。

このような考え方は簡単に変わらないと思いますが、それが「大清帝国」となってくると、その秩序観だけでは統治できなくなってきました。確かに、中原からその周辺の小さな世界で王朝が興り、滅亡していくプロセスでは、この秩序観念で済んだかもしれません。しかし、大清帝国のような巨大版図と多様な人種を擁する国になると、そうはいきません。事実、モンゴル、チベット、ウイグルなどは、大清帝国の時代に版図に組み込まれた地域です。そして、チベット族は、チベット自治区だけに住んでいるのではなく、チベット高原全域に住んでいる人々です。少数民族という言葉は間違いで巨大な民族集

団です。これを統治していくのは極めて難しいことです。そこで、大清帝国では次のような方式を考え出します。チベットにはチベット王、ウイグルにはウイグル王、モンゴルにはモンゴル王をそれぞれ任命し、彼らを支える官僚群にも爵位を与えます。そして、それらの地域をこれまで通りのやり方で統治していくことを認めます。ただ、その条件として、清王朝への忠誠意を表すために、それぞれの地域の財宝を北京の朝廷に持つてくるのです。これが朝貢です。つまり主従関係、君臣の礼を尽くすことが求められたのです。極めて分治的、包容的な支配システムです。

考えてみれば当然のことです。アメリカも連邦制で州の自立性は日本の地方自治体に比べて圧倒的に大きいですし、インドやローマもそうです。塩野七生さんの『ローマ人の物語』を読むと、ローマ軍が外縁にある国々を占領後、その占領地の従来の支配者に統治権を与える形で、次々と占領地を拡大して巨大なローマ帝国を築いていったことが分かります。日本のような小さな国土と少ない人口の国の統治とは、明らかに異なる分権的、分治

そして、冊封体制は、モンゴルやチベット、ウイグルのような国内異民族だけではなく、外国との関係においても、そのような統治体制をとってきました。この冊封体制に組み込まれた典型国が朝鮮とベトナムです。ベトナムの話は後日にしますが、いまの北朝鮮と韓国を含む朝鮮半島が独立国家であったことはありません。中国の王朝に礼を尽くす冊封体制の下に置かれました。

朝鮮の伝統的国際秩序観念

話が横道にそれますが、古い歴史を紐解きますと、日本が一九一一年に朝鮮を併合し、三十六年間の日本統治時代が続きます。韓国では、それこそが「清算」されるべき過去だと言って、朴槿恵大統領も「歴史清算」を繰り返し言っております。しかし、この「歴史を清算する」という考え方が日本人には分かりません。私は今年、後期高齢者となり、否定したい、できれば抹殺したい過去は多くあります。しかし、「過去を清算する」といった感覚はありません。彼らが従軍慰安婦問題で、日本を徹底的に叩かなければならないという発想は、そのような

的、包摂的、包容的な統治の仕方です。

このような「中華の礼式に服させ、見返りに王位を与えてその王に領土と領民の統治を委ねる伝統的な国際秩序観念」が大清帝国の冊封体制です。冊封の冊はあなたを王と認めてその領土と領民の当時を委ねる委任状のことです。封は封土、つまり領域を示しています。これまでも通り領土と領民を統治して結構たという意味です。

このように、大清帝国は軍事的威圧で統治するというエネルギーの過剰な方式で中国を統治していたのではなく、むしろ、王朝の権威によって巨大な国を治めてきました。康熙帝、乾隆帝、雍正帝など、清国をつくった初期の天子様の名前を耳にされたことがあるかと思えます。最近の中国は歴史ドラマのブームですが、主人公の多くがこの時代の人です。中国人が時代劇としてイメージするのは清時代なのです。満州族による征服王朝の王様が時代劇の主人公になるというのは、日本人にはよく分かりません。それほど度量が広いと言えば広いのかもしれませんが、純潔主義や同質性を気にする国家とは、この点でも大きく違います。

感覚から出てきています。

話を元に戻して、朝鮮半島は中華が君主で、自分はその臣下となる、そういう中国との君臣の関係にありました。これが朝鮮半島の「事大主義」です。事大とは、「大に事（つか）える」という意味です。「大」とは、まぎれもなく中華です。李氏朝鮮の開祖、李成桂の一文に「小を以て大に事ふるは保国の道也」とあります。「小さい国は大きい国に事えるよりほかに生きようがない。君臣の関係で可愛い奴だと中国に思ってもらうよりほかに生きていくすべはない」という考え方です。

私も朝は朝鮮という言葉を使いますが、その国号を決めたのは朝鮮ではなく、中国（当時の明）です。朝鮮王として李朝の王様を認めたのも中国です。それだけでなく、度量衡制、カレンダー、儀式などの全てが中国から導入されています。それだけ朝鮮は中国に忠誠を尽くしていたのです。

現在のソウルの西大門の辺りには、迎恩門という門が建っていました。君民である中国が臣民となる朝鮮の漢城（現在のソウル）に派遣した使者を、朝鮮王が出迎え

るための門です。しかし、中国の使者が迎恩門を通って漢城に入っても、出迎えた朝鮮王はこの門を通ることができず、門を迂回して漢城に入っていきます。そして、中国の使者が門を通って北京に帰る時にも、お見送りをする朝鮮王はこの門を迂回して、お見送りをします。まさに君臣の関係を絵に描いたような門です。

その時の儀式が「三跪九叩頭之礼」です。跪いて号令に従って頭を地に三回打って立ち上がり、再び跪いて頭を三回打ち、立ち上がって三度跪いて頭を三回打つという、三回跪いて九回頭を地に打つ、君臣関係を体で表現すればこうなるという屈辱的な儀式です。さすがに、そこまで屈辱を余儀されなくてもという考え方が生まれてきても不思議ではありません。しかし、そのような素振りも少しでも見れば、一発で巨大王朝に潰されてしまいます。朝鮮は表層と内面の分裂に苦しみます。

その憤懣を形に表すチャンスがやってきました。それが一六三六年の清王朝の誕生です。伝統中国の国際秩序観念からすると、明らかに満州族は東夷という蛮族です。その蛮族が北京に攻め入って連合政権をつくったわけ

です。蛮族支配に屈した中華に、どうして朝鮮が忠誠を尽くさざるを得ないのかという疑念が生まれてくるのは当然です。その朝鮮の中で生まれてきた思想が「小中華主義」です。中華の伝統を正統的に引き継ぐのは清王朝ではなく、朝鮮王朝だということです。中華よりも中華的存在の朝鮮を五百年続けたのが、李氏朝鮮です。

しかし、「中華文明の正統的な継承者は朝鮮だ」などと清国に対して言えば、たちどころに朝鮮半島は潰されてしまいます。事実、李朝末期になると内乱や政争が日常茶飯事のようになり、対立する両派が共に清国に連絡し、大量の清国軍が朝鮮半島に入ってきて、乱を治めることが年中行われます。現実の国際関係では清に服属、その儀礼を守りながら、これに「事大」する一方で、内面では清朝を軽侮する生き方を選択したわけですが、この表層と内面の分離と葛藤、現実の思想との亀裂は、イデオロギー国家の不可思議というより他ありません。

日本統治への歴史清算

再び横道にそれますが、このような朝鮮が隣にいたの

ではたまったものではないと、明治の指導者が考えたのは当然のことです。朝鮮で内乱や政争が起こるたびに、大量の清国軍が朝鮮半島にやってきます。対馬海峡を一つ越えれば九州です。清国の影響力が半島全域に及んでいたのです。清国と朝鮮の君臣関係を何とか切断しなければ、日本の自立はあり得ないと明治の指導者は考えました。中でも陸奥宗光外務大臣はそう考え、「軍事力では日本が相当劣っているものの、初戦で一挙に勝負すれば清国は屈する」と日清戦争に打って出ます。

開戦した明治二十七年（一九〇四年）は、明治政府が成立してから、わずか二十七年しかたっていない、日本近代史の中でも苦難に満ちた時期です。国民は稗と粟しか食べられず、租税負担率が五割を超える状況の中で艦船を建造し、日清戦争に挑み、そして勝ちました。その講和条約の第一条には「朝鮮は自主独立の国なり」と記載されています。この第一条は日清戦争の目的を如実に示していますが、朝鮮半島は清国の属国ではなく、自主独立の国であり、日本は自主独立の国として朝鮮と付き合っていくというものです。

しかし、韓国が清国から独立した自主独立の国になって、日朝関係がうまくいったかとなると、率直に言ってしまうはいかなかったです。いまの韓国の政界を見ていても分かるように、左右上下で正統性を主張し合う、大変な論争国家です。国内が一つにまとまる政治的な凝集力が、極めて弱い国柄です。常に内乱のような事件が起こってきました。特に科挙試験に受かった超エリート集団の官僚は、両班と言われ、常に二派から三派、四派と分かれてイデオロギー論争を繰り返してきました。

その結果、日本としては朝鮮を独立はさせたものの、これでは日本の安全を保つことができないと、慎重な政治家であった伊藤博文初代韓国統監も迷い始めます。その中で、伊藤博文が朝鮮独立派のアン・ジュングン（安重根）にハルビン駅で暗殺されますが、そのことで国内の反朝鮮感情が一挙に盛り上がり、一九一一年の日韓併合に至ります。

中華よりも中華的なる朝鮮半島にとって、日本は「華夷秩序」の観念から言えば、はるか遠方の文明度の圧倒的に低い、取るに足りない卑小な国です。その日本が韓

国を侵略し、あまつさえ併合してしまったことはとても許されることではない。それが今日まで続く韓国と北朝鮮を含めた朝鮮半島の人々、特に指導者の平均的な感覚です。私は一九七〇年代から韓国経済を見ていますが、いよいよこの反日的なセンチメントを抑えようがなくなってきた。

朝鮮の人々が繰り返し主張する「歴史清算」、盧武鉉時代の「過去史清算」の意味するところが、私にはよく理解できませんでした。しかし、完全な鎖国時代の李氏朝鮮時代に布教活動に入った六人のフランス宣教師が、本国パリの外邦伝教会本部に朝鮮人と朝鮮社会を克明に書き送った書簡を送り、これを素材にしてまとめたジャルル・ダレの『朝鮮事情』（東洋文庫）を読んで何となく分かりました。

その中には、こう書かれています。「朝鮮では、父親の仇を討たなかったならば、父子関係が否認され、その子は私生児となり、姓を名乗る権利さえもなくなってしまう。子のこのような不孝は、祖先崇拜だけで成り立っているこの国の宗教の根本を侵すことになる。たとえ父

が合法的に殺されたとしても、父の仇あるいはその子を、父と同じ境遇に陥れなければならず、また父が流罪になればその敵を流罪にしてやらねばならない。父が暗殺された場合も、同じ行為が求められる。この場合、犯人はたいいてい無罪とされる。なぜなら、この国の宗教的國民的感情が彼に与するからである」。

「罪千載に及ぶ」という言葉が浮かんできますが、これは現在の韓国でも行われていることです。「日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法」が、まさにそういう法律です。朝鮮は一九一一年から三十六年間、大日本帝国の一部であり、日本が統治していましたが、統治するには当然、朝鮮の人々の協力が必要でした。その日本に協力した人々を「対日協力者」と呼び、その罪を明らかにして、彼らの財産を没収しようという法律です。もちろん彼らが生きていることなどあり得ませんが、何とこの法律では、日本統治時代に協力していた人の孫もしくは曾孫が、韓国で所有している資産を没収し、国家に帰属することを決めています。この法律は二〇〇四年に、与野党の超党派議員の提案で成立しています。

言うまでもなく、近代法にはこのような精神はありません。犯罪者を逮捕してから作成した法律は「事後法」として禁じられています。これを守らない国は近代国家とは言えないというのが我々の常識です。百年以上も前の罪を明らかにして、その子孫の財産を没収する国などは、到底、法治国家とは言えません。

抑止力と放置

二〇一一年八月には、「元慰安婦の個人請求権放棄は違憲」とする韓国の憲法裁判所の判決がありました。私の少年時代には売春婦と呼んでいましたが、日本には公的に認められた慰安婦がいたのは事実で、当時は多くの国々にもありました。ただ、日本人が問題にしているのは強制連行です。慰安婦はこの国、いつの時代にもありませんでしたが、それを軍や公権力で強制的に連行して従軍慰安婦として戦地に送ったという事実は、日本政府が調べたところ、日本だけでなく、韓国、アメリカなどの国々も含め全くありませんでした。それにもかかわらず、韓国の屈強な政治的要求に応じて、それを認めたとと思われる

かねない「河野談話」が出されました。もちろん談話そのものには、「強制連行」の言葉はありません。しかし、記者会見の質疑応答の席で、それを認めるような発言をしてしまいました。

それ以来、日本は強制連行を認めたと、少なくとも韓国や中国は受け止めており、アメリカでは慰安婦像を設置するキャンペーンが行われています。軍に慰安婦は存在しましたが、強制連行などはありませんでした。従軍記者や従軍医師はあったものの、従軍慰安婦という言葉も当時はありませんでした。後に日本の弁護士がつくったものです。慰安婦の方々の心や体の苦しみを考えると誠に申し訳ない気持ちですが、強制連行がなかったというのが真実です。

しかし、その日本の主張も韓国人にはほとんど何の影響も与えません。韓国の憲法裁判所で従軍慰安婦を政府が問題にしないのは、憲法違反だという判決が出てしまったからです。いかに日韓政府間で、この問題を議論しようとしても、もう答は出てきません。韓国の全てのマスコミも日本の説に「イエス」と言うことはあり得ません。誠

に残念ながら、この問題は未来永劫とまでは言えないまでも、今後も続かざるを得ません。

それだけでなく、すでにご承知のように、韓国の司法当局によって、二〇一三年七月に「新日鐵住金元徴用工に対する賠償金支払い」のソウル高等法院判決、「三菱重工元徴用工に対する賠償金支払い」の釜山高等法院判決が下りました。当時の朝鮮半島は大日本帝国の一部でしたので、自主的、募集にかかわらず、徴用工が多く来ていました。その賃金支払いが不十分だとの判決です。で、日本企業は支払わなければならず、支払わなかった場合には、韓国にある日本企業の資産が没収される可能性も出てきます。韓国といえども三権分立の国ですので、行政は司法の判断によって行動しなければなりません。

二〇一四年十一月にも、産経新聞の加藤達也前ソウル支局長が在宅起訴されています。セウオル号が沈没した日、午前九時から午後五時までの七時間、朴槿恵大統領の所在が分からず、その空白の時間の行動が焦点となっていました。加藤前支局長は、そのことに触れた韓国で最大の新聞、朝鮮日報の記事をほとんど転載する形で

報道したのです。ところが、不思議なことに朝鮮日報には何のお咎めもなく、産経新聞だけが対象となり、加藤前支局長が出国禁止のまま裁判が審理中です。

繰り返しますが、一九六五年六月二十二日の日韓基本条約によって、個人であれ、国家であれ、日本の韓国統治に関する過去の問題は、最終的かつ完全な形で決着しています。したがって、いまいくつかあげた韓国で出された法律や判決は全て、日本の立場から言えば無効です。しかし、韓国は有効だと主張しています。つまり、韓国は国際条約さえ守らない国だということになります。

私があえて反中・反韓的な主張をしていると受け取らないでください。私は中国や韓国とは長い付き合いで、お世話にもなり、友人も多く、多くの留学生も受け入れていきます。決して個人的な感情で物事を判断してはいません。ただ、外交の最前線に立つ外交官の方々には、このような事柄の本質をしっかりと認識した上で、中国や韓国との折衝に臨んでいただきたいと考えています。両国のトップが首脳会談で会うこと自体が目的化してしまふような関係は良くないことです。

最後に、本日の演題である「求められる政策」について、一言申し上げて終わりにしたいと存じます。

中国は膨張とともに力で押してきました。ただ、押し方も、人民解放軍が出てきて、一挙にどこかの島を占領するなどといった、露骨なやり方は取りません。少しずつ、少しずつ戦略を持って実効支配を展開していきます。考えてみれば、尖閣諸島を占領することなど、やろうと思えば簡単です。しかし、そのようなことはやりません。着実に既成事実をつくり上げ、いつの間にか中国の領海になっていったという戦略を持って進めています。戦略を持ってやってくる中国に対しては、こちらも戦略で対応しなければなりません。それに対抗するためには、日米関係をもっと信頼深いものにし、抑止力を強めていく必要があります。集団的自衛権行使容認に関する、今国会で始まる幾つもの法制化が何とか実現してほしいと考えます。キーワードは「抑止力」です。

一方、韓国の場合には、「抑止力」という観念は意味がありません。なぜならば、韓国はアメリカと米韓同盟を結んでおり、言うまでもなく、日本もアメリカと日米

同盟を結んでいます。韓国と日本の同盟関係はないものの、韓国が日本を攻めてくる、あるいは日本が韓国を攻めていくという選択は、事実上あり得ません。そこでは抑止力という観念が働かず、有効ではありません。逆に言えば、その構図に甘えて韓国は日本に言いたい放題しているとも解釈できます。

韓国に対しては、有効な政策はなく、少なくとも日本から働きかけることは、愚かな選択です。外交らしくはありませんが、ここは放っておくしかないと思われまふ。「君子の交わりは水のごとく淡し」という表現がありますが、そのような淡いつき合い方も、一つの外交としてあり得ます。

日本と緊密な関係を持たないことは、韓国にとつて不利で損なことだという自覚が、韓国の内部から生まれてくるのを気長に待つしかありません。政策とは言えないかもしれませんが、対芯としてはそのような選択もあるのではないかと考えています。ちょうど時間となりました。ご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

問 日本の南進政策にも、少なからず影響を与えたと
思われる、吉田松陰の思想について、どのようにお考え
でしょうか。

渡辺 日本が朝鮮を併合した年は一九一一年ですが、
二十世紀初頭は、帝国主義の全盛期で、弱者に安住の地
のない時代でした。それは発展した文明国が、未開国に
文明の光を当ててやるために、開国を迫り、占領して統
治するのは当然のことであると捉えられていた時代です。

したがって、日清戦争に勝利して台湾も領有し、遼東
半島は三国干渉によって清国に還付されますが、その後、
朝鮮半島を併合し、いまの中国東北部とモンゴル東端部
に満州国を建国した、膨張主義の時代が日本にもあった
ということです。

本日の主テーマではありませんが、日本が満州国とし
て建国した地域は、清国の実効支配地域ではなく、当時
は馬賊や後に軍閥と言われる諸勢力が覇を競っている所
でした。当然、ロシアも、ここに南下しようとしていま

した。鴨緑江を越えれば朝鮮、そして、対馬海峡を越え
れば九州です。その危機感のもとで、日本は満州国を建
国します。

その時代に生きてきた人にとっては、国力、軍事力の
膨張とともに版図を拡大していくことは、どの国でも
当たり前のことでした。ジャーナリズムや歴史家が、い
ま生きている現代の価値観に立って、その時代のことを
判断することが一番危険なことです。当時の人間であつ
たならば、こう考えたのであろう、ああ考えたのであろ
うという想像力のもとで歴史を紡いでいくべきです。

しかし、日本の歴史学はそのような視点には立って
いません。いま中学校や高等学校で使われている歴史教科
書の多くが、第二次大戦は日本のアジア侵略の歴史であ
つたかのように記述されています。真実を伝えておらず、
政治的なイデオロギーの強い、このような史観で歴史を
教われれば、子供達は洗脳されかねません。

そのような経緯から、「新しい歴史教科書をつくる
会」による教科書が作成されたわけです。現在は二社が
このような趣旨の下で教科書を作成しており、一社の教

科書を私も監修していますが、極めて真つ当な教科書で
す。しかし、両社を合わせてもシェアの一〇％に届きま

せん。現在の価値観に立って過去を断罪する教科書や世
論は、依然として残っており、これを何とか変更して、
真つ当な歴史に戻していきたいと考えています。

安倍総理も、同じような考え方から、戦後七十年の談
話を検討されているのだと思います。国会では、戦後五
十年の村山談話、戦後六十年の小泉談話を継承するの
かが大きな焦点となっていますが、何とか安倍総理
には、真つ当な談話を出してもらいたいものだと思っ
ています。

問 過去に何が起きたかを知るのには難しく、過去の歴
史は判断のしようがないということでしょうか。

渡辺 そうです。結局、分からないという史観です。
歴史史観には、大きく言えば人間の社会は進歩していく
という、マルクスに代表される発展段階説に立った「進
歩史観」と、テクノロジーは進歩するものの、「人間社会
は同じようなことを繰り返しているとする「循環史観」
に分けられます。私はどちらかという後者の立場です。

願うならば、私も前者の立場に立ちたいところですが、
現実の後者だと思います。

人間社会は循環であると考えることによって、現在の
我々は、どう行動すべきかを歴史から学んでいくことが
できます。歴史の知恵とは、そのような感覚に立つこと
によって、初めて生かされてきます。放っておいても進
歩するとの見方からは、歴史的な感覚、歴史意識は生ま
れてきません。

国際関係についても、そのような観点が必要です。人
間社会は、時間の経過とともに、自然に溫和的、協調的
で、平等なものになっていくと教えられましたが、いま
世界中で起こっていることを見ると、歴史は先祖返りを
しているようにも思えます。進歩史観に立つのか、循環
史観に立つのかというのは、物事を考える時の重要なポ
イントになるだろうと思います。